

## はじめに

本書は、二〇二五年六月二十八日に中部大学・京都先端科学大学の共催で開催されたオンライン・シンポジウム「リベラルアーツと歴史」をもとに編纂されたものです。中部大学「創造的リベラルアーツセンター」はこれまでに同様の書籍として『リベラルアーツと外国語』（二〇二二年）、『リベラルアーツと自然科学』（二〇二三年）、『リベラルアーツと民主主義』（二〇二四年）、『リベラルアーツと芸術』（二〇二五年）を刊行し、さらにセンター準備期の『21世紀のリベラルアーツ』（二〇二〇年）も含めると計五冊を上梓してまいりました。前回の『リベラルアーツと芸術』より、京都先端科学大学との共催によるシンポジウム開催が実現、また本の装丁も一新され、新たなシリーズが始まったところでございます。今回はその二冊目になります。

本書の第一部は当日のシンポジウムの記録、第二部はテーマに関する八名の執筆者によるエッセイという構成になっています。

これまでのシリーズ同様、本シンポジウムでも、各界で第一線に立つ方々をお迎えし、今回のテーマである「リベラルアーツと歴史」について、多角的な視点から熱のこもった議論が交わされました。大学関係者だけでなく、教育・研究機関、マスコミ・出版関係者、そして学生や一般の方々など、多様な立場の皆さまにご参加・ご視聴いただき、当日も数多くの質問や感想が寄せられました。どの発言からでも、登壇者それぞれの考察に深く耳を傾け、テーマを自身の問題として受け止めてくださった様子がうかがえ、主催者として大きな喜びと励ましを感じております。

近年、少子化や社会構造の変化により大学教育のあり方が厳しく問われるなか、リベラルアーツ教育をめぐる議論もいっそう多様化しています。同時に、世界では戦争や分断、格差の拡大、さらには生成AIの進展など、人間社会の根幹を大きく揺り動かす出来事が続いています。こうした時代にあつて「歴史」と向き合うことは、過去の出来事を知るだけでなく、現在をどう生き、どのような未来を選ぶのかを問う行為でもあります。本書に収められた議論やエッセイが、いわゆる歴史学の枠を越えて、これからの大学教育において「学ぶ」「考える」ことの意味を問い直すとするすべての方々にとって、そしてリベラルアーツ教育の意義

を改めて問い直す契機となれば幸いです。

鈴木順子